

Ⅲ 草種と見分け方

「草種」は牧草収量を決定する最も重要な要素です。

例えば、雑草のシバムギに比べてチモシーの収量が3割ほど高いのは、茎が太く（写真Ⅲ-1）、葉が大きい上に、高密度の栽培が可能のためです。「草種」の違いが、収量構成要素の「一茎重」と「茎数」を決めます。

「草種」の選択は、①草の利用目的と②適性に基づいて行います。

利用目的は、採草用か放牧用か兼用なのかを明確にし、調製がロールなのか細切サイレージなのか、あるいは、収穫はコントラクター利用を前提にするのかどうか、草地と番草によってサイレージを使い分けするのかもしれないか・・・などを念頭に置いて草種を選定します。例えば、調製がロールサイレージであれば、茎が太くて硬い草種はラップに穴を開けカビ発生の原因となるため、極少量の混播に制限します。一方、コントラクター利用で細切サイレージを前提にするなら、茎の太さは関係ありません。むしろ、収穫期間が短いため、草地毎の均一性や、収穫時の乾き易さがより重要な選択項目になるかもしれません。

適性は、牧草の持続性や生産コストに直結するため、より慎重に選定すべき指標です。草地更新では、栄養価が高くても冬枯れに弱いペレニアルライグラスの選択をどう考えるか、大きくて重量のあるスラリータンカーを年に何度も走らせるほ場で、元来踏圧に弱いアルファルファを選択すべきかどうか、排水不良草地なのに湿害に弱いチモシーを選択することの良否は熟考に値します。

本章は、そうした選択の判断材料として、「草種」の特徴を整理すると共に、その見極め方のヒントや、は種・混播適性を示します。



写真Ⅲ-1 チモシー（左）とシバムギ（右）



写真Ⅲ-2 草種の違い

左からアルファルファ、オーチャード、チモシー、シバムギ、レッドトップ、リードカナリー、左写真のみメドウフォックステイル